24時間365日 市民を介護で困らせない
社会福祉法人 小田原福祉会

■「人」は存在するだけで尊い

神奈川県小田原市で40年にわたり地域福祉に貢献している社会福祉法人小田原福祉会は、1978年の特別養護老人ホーム潤生園の開設からスタートした。

運営理念は、「人は人として存在するだけで尊い」。開設者・初代理事長で現会長の時田純氏は、小田原市役所勤務を経て、小田原市議会議員を3期務めた後、地域福祉の発展を願って小田原福祉会を創設した。「介護で市民を困らせない」をモットーに、現在は、特別養護老人ホーム、グループホームを始め、訪問介護、デイサービス、ショートステイ、配食サービスなど、在宅生活を支える様々なサービスを複合的に提供している。

■日本初の「介護食」を開発

潤生園では、食事を介護の基礎と位置付けており、日本で初めての「介護食」を開発、進化させてきた。1991年には日本栄養改善学会から「学会賞」を受賞している。

▲旬の食材を用いた、色・味・舌触りを感じられる食事

飲み込みに障害がある高齢者にも、刻み食、ミキサー食などの元の形状が分からない食事ではなく、できるだけ旬の食材の形をそのままに、色・味・舌触りなどを感じながら、栄養が確保されるものを提供できないか。管理栄養士と試行錯誤の結果、飲み込みやすくするため、ゼラチンや寒天を使用して唾液と同じ形態の食事を作り上げた。その後も様々な介護食を開発し、多くの入居者に最期まで口から食べ食事を楽しんでいただいている。通常の調理の2～3倍の時間がかかるが、QOLの向上に繋がり、尊厳を守れることを大切に考えている。

また、食のない在宅は成り立たないとして、安否確認を兼ねた配食サービスを行っている。咀嚼力・病状などを判断した上で、おかゆ・介護食・糖尿病食など、単なるお弁当ではなく、あくまでもその方個人のお食事を届けている。

■他法人との共同研修を多数実施

小田原福祉会では職員研修にも力を入れている。人財育成センターを設置して、法人内スタッフのスキルアップに努めるほか、1992年に社会福祉法人による全国初の介護職員養成研修事業を自主事業で開始した。

また、法人の垣根を超え、他の社会福祉法人等と共同での研修も行っている。次世代のリーダーを育成したいと2015年に3法人でスタートした「Draw Up！研修」は、その後3法人が加わり、現在6法人で継続しており、2020年はコロナ禍で中止したが、これまでに5回の実績がある。

対象はリーダー候補の職員で、1回の研修に約10ヶ月かける。1泊2日の宿泊研修を2回実施し、その間に、参加者の法人をお互いに訪問する「相互現場訪問」が行われる。「相互現場訪問」は、各法人のノウハウを提供し合うことになる画期的なプログラムで、他法人の良いところを取り入れられると同時に、自法人の強みを再発見することに繋がり、参加者はとても刺激を受けているという。

■これからも「人が原点」の介護を続けていく

2018年からは、長女の佳代子氏が理事長に、純氏は会長に就任した。佳代子氏が潤生園のこれまでの実践の中で最も自負しているのが、看取りの対応である。施設内でも在宅でも、ご家族に安心して看取ってもらえるよう、看護・介護スタッフのチームケアで、最期まで、尊厳と生活の質を大切に過ごしてもらえるよう努めている。同法人が今まで看取ってきた件数は、施設・在宅合わせて約1,000件に上る（2020年度の特養内看取りは定員100名のうち53名）。

同法人では、介護保険制度内の多様なケア事業を手掛けているが、「困った人を見過ごさない」の思いから始めていたサービスが、結果的に制度に先んじていた、ということも多い。今後の新たな取り組みとして、高齢者と障害者が共に支えあいながら生活する「共生型サービス」にも挑戦する。「時代が変わっても潤生園の介護は人が原点。これからも、安心して地域で生活していただくために、全てのステージに合わせた支援をしていきたい。そして、人々が社会生活を送る上で必要不可欠な人財である“エッセンシャルワーカー”として、地域に寄り添い歩み続けたい」、と佳代子氏は語る。

社会福祉法人 小田原福祉会
神奈川県小田原市穴部377
https://www.junseien.jp/

会長・**時田純氏**

理事長・**時田佳代子氏**